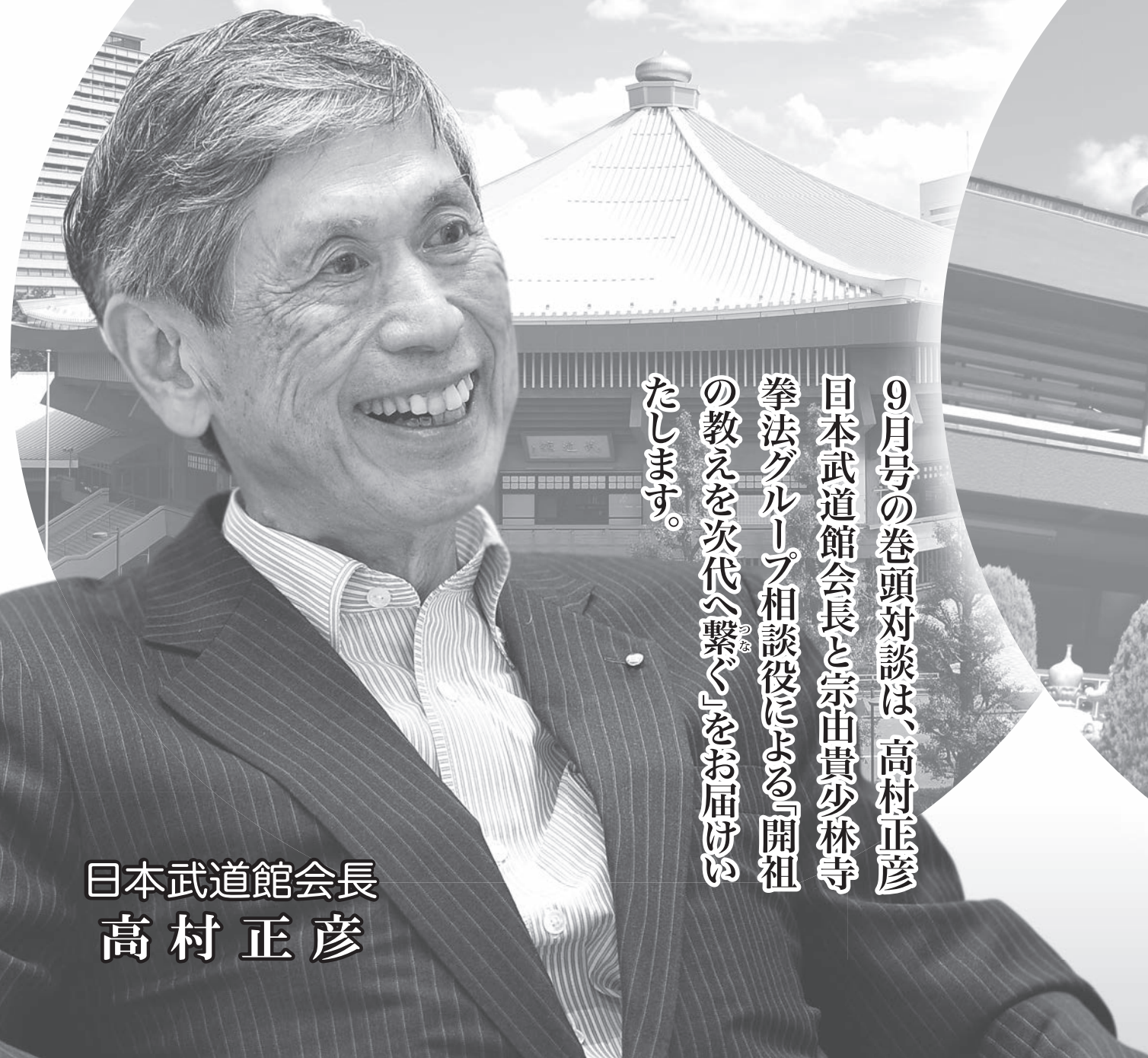


巻頭特別対談「道を極める」

開祖の教えを 次代へ繋ぐ



日本武道館会長
高村正彦

9月号の巻頭対談は、高村正彦
日本武道館会長と宗由貴少林寺
拳法グループ相談役による「開祖
の教えを次代へ繋ぐ」をお届けい
たします。



立合
(公財)日本武道館
理事・事務局長
吉川英夫

少林寺拳法グループ相談役
宗由貴



高村 正彦 (こうむら・まさひこ)

1942年生まれ。1980年衆議院議員に初当選、通算12回当選。94年国務大臣経済企画庁長官、98年外務大臣、2000年法務大臣、07年防衛大臣、07年外務大臣。12年から18年まで自由民主党副総裁。日本武道館にあっては1996～2004年監事、04～07年、09～17年常任理事を務めた後、17年会長に就任。ほかに現在、日本武道協議会、全国都道府県立武道館協議会、日本古武道協会の各会長も務める。

父は、人としての在り方にとってもこだわっていたので、礼儀作法からみっちり仕込まれました。明治生まれということもあり、とにかく怖い人でした。高村 怖い人ですか。宗 優しい面もありましたが、やはり怖くて厳しい人でした。弟子も一緒にいましたから、同じように私も育てられたという感じでした。

でも、父親としてすごく好きでした。優しく接してくれて、いろいろなことを教えてもらった面と、本当に人に厳しい面と両面を持ち合わせていました。厳しさと優しさ、温かさのバランスがとれている父のことを本当に大好きでした。ある時期までは……。高村 ある時期までというのはどういうことですか。

宗 夜に食事をしている時もそうなのですが、ニュースを見て父がコメントをする、そして娘の私に、「どう思う」と聞くのです。政治の話、経済の話、時には女性についての話も意見を求められました。何も考えていないことが一番いけないことだと、ずっと言われて育ちました。高村 NHKテレビの「チョコちゃん」



宗 由貴 (そう・ゆうき)

1957年生まれ。1980年、少林寺拳法創始者である父・宗道^{そうどう}臣遷化後、少林寺拳法二世師家となる。金剛禅総本山少林寺管長、財団法人少林寺拳法連盟会長、少林寺拳法世界連合会長、学校法人禅林学園理事長、一般社団法人SHORINJI KEMPO UNITY代表理事、少林寺拳法グループ代表、一般社団法人スポーツ・コンプライアンス教育振興機構顧問を経て、2020年1月1日、少林寺拳法師家を第三世に承継し、現在は少林寺拳法グループ相談役。2児の母であり、3児の祖母。

少林寺拳法創始者 宗道臣開祖を父として

高村 本日は、少林寺拳法グループのトップを約40年務められ、現在もグループの相談役として組織を支えておられる宗由貴さんをお迎えしました。私も大学時代から少林寺拳法をたしなむ

一人であり、由貴さんとお話するのを楽しみにしていました。宗 よろしくお願います。高村 まず、宗道臣開祖との思い出と

いいですか、お嬢さんから見ると、開祖はどのような方でしたか。宗 私が生まれたのは、少林寺拳法が創始されてちょうど10年目の年でした。当時は、組織を香川県から全国へ

と拡大させる準備時期であり、我が家には、多くの内弟子の方が住み込んでいました。普通の家庭の中に一人娘がいるというよりは、弟子たちの中に娘もいるという感じでした。姉が2人いますが、私が生まれたときにはもう嫁いでいて、完全に一人っ子状態でしたが、兄がたくさんいるような環境でした。

のような人ですね。「ぼーっと生きて
いるんじゃないよ」と（笑）。

宗 そうです。何か答えられればいい
のですが、答えられないのは駄目。そ
の前提として、何も考えていないのが
一番いけないことでした。いいか悪い
か、正しいか間違っているかではなく
て、自分の見方や考え方を持たなけれ
ばいけないと、小さいころから教わっ
てきました。それが、ある年齢になっ
てくると、もつと違う話がしたいのに、
と思うようになりました。中学の終わ
りぐらいからです。父に對しても言
いたいことを言って反発しました。

高村 開祖は、家族にはこういう話を
して、内弟子にはこういう話をする
というのではなく、みんながいる前で話
をするのですね。

宗 内と外、家族と弟子たち。区別が
ないので。

高村 そこまでオープンな人は、いま
までに聞いたことがありません。私は、
秘書にする話と家族にする話は別々で
した。



昭和33年ごろの開祖と宗由貴氏

たこと、嬉しかったこと、腹が立った
ことなどを自分の価値観で話してくれ
る人なのです。私は、若いころから「あ
れは刷り込みだ」とずっと思っていた
のですが、あるとき気が付きました。
「薫習」ですよ。そこにいることに
よって香りが体に染み込むように、い
つの間にか同じ考え方、生き方をして
いると思うことがたくさんあります。

高村 人間関係という面ではいかがが
でしたか。

宗 人と人との繋がりが一番の宝で、
人に必要とされる、喜んでもらえるこ
とが一番の幸せだと、物心がつくかつ

宗 子どもだから聞かなくていい、知
らなくていいと言われたことがありま
せん。でもそれは、私にはうれしかつ
た時期と、鬱陶しかった時期がありま
した。この年齢になってやっと分かつ
たことなのですが、それはすごいこと
だなと今さらながら思います。

膝の上で聞かされた 父の教え

高村 幼かった由貴さんには開祖はど
んなふうに映っていたのでしょうか。

宗 私は昭和32（1957）年の生ま
れで父は明治44（1911）年です。
父とべつたり一緒にいたので、大正か
ら昭和、そして戦争の話をたくさん聞
きました。まるで、スクリーンに映し
出される映像のようにリアルにイメー
ジできました。父は時には本当に声を
上げて泣く人でした。とにかく飾らな
いそのままの人なのです。笑うときは
ケタケタ笑うし、怒るときは本当に怒
りを爆発させる人なのですが、辛かつ

かない頃から、父の膝の上で聞かされ
ました。その影響から、今の自分が出
来上がったような気がします。お互い
が頼る、頼られる人間関係が一番の宝
だから、そのために少林寺拳法を始め
たのだという話をずっと聞いてきまし
た。

高村 お嬢さんから見て、お父さんは
熱情というか、熱い人ですか。

宗 熱い人です。ものすごく熱かつた
と思います。

高村 私が開祖と初めて対面したの
は、大学生の時、少林寺拳法を始め
て2カ月ぐらいの時でした。基礎の基礎
を教わっただけなのにいきなり香川県
多度津町での本山合宿に行かされまし
た。合宿ではまず、高弟の先生が教え
てくださいますよね。時々、開祖が出
てこられて、説明を加えてくれるので
すが、これがものすごく分かりやすい
のです。技そのものも分かりやすいし、
実際の護身の際に、それがどう使える
のかという話がとても分かりやすい。
武道家はなんと合理的なのかと思いま





宗 開祖は日本の将来を担う大学生に大変期待をし、どんなに体調が悪くても講義をしました。血気盛んな大学生に、「君たちは何のために突いたり蹴ったりしてる？ それだけじゃダメだよ！ 志を持ちなさい」と熱く語っていました。

**「志は大きく持てよ」
青年たちに蒔いた種**

した。ただ、その時は熱い人だということよりも、すごく合理的な人だと思いました。

宗 その当時行っていた法話を聞かれたのですね。

高村 合宿中、学生たちが正座して緊張した面持ちで開祖を待っていると、現れた開祖はいきなり「楽にしろよ、膝を崩せよ。話なんて耳だけ傾けていればいいんだ。何なら寝っ転がったっていいぞ」と言うのにはびっくりしましたね。それで私はすぐにあぐらをかきました。当時、私は体幹も弱かった

ので、背は丸まって、顎が突き出た自分の姿が想像できるのです。そのような姿を見ても、開祖は何も言わず少林寺拳法をやって体幹が鍛えられれば姿勢も良くなるさ、くらいのことで大目に見てくださったのだと思います。

その法話の中で、お釈迦様は苦行を禁止したのだと、苦行はいけないのだと。さらにその流れで、軍隊の新兵いじめや運動部での下級生いじめ、鉄拳制裁などというけしからんことがあつていいのかと、ここは少し熱っぽく語っていました。

しました。ですが、私は小生意気なので、先輩から絶対に殴られるだろうと思いい、そのときは直ちにやめて、司法試験の勉強に専念しようと決めていました。入部後、本山合宿で開祖の法話を聞く機会を得て、「下級生いじめは絶対にいけない」と熱っぽく語っておられたので、ひよつとしたら殴られないで済み、長く続けられるかもしれないと、思ったことが記憶にあります。

また、「君たち、志は大きく持てよ。ここにいる中から国会議員や大臣だって生まれるかもしらすぞ」と言われ、気宇壮大な人だとも思いました。

学生時代は政治家になるつもりは全然なく、大学卒業後はご存知のように弁護士をしていました。1980年に、大平正芳内閣の「ハプニング解散」というのがあって、予測に反して内閣不信任案が衆議院で可決され、大平内閣は衆院解散の道を選んだのです。ちょうど、開祖がお亡くなりになった直後ですよね。

宗 そうですね。

高村 そのとき、私は何を勘違いしたか、直後の衆議院議員選挙に立候補します。それも公示のわずか12日前に。それまで全く準備をしていないのにです。

宗 突然ですか。

高村 私は、開祖がおっしゃっていた「この中から国会議員や大臣が出るかもしれない」という言葉が直接影響したとは思いませんが、ひよつとしたら潜在意識としてはあつたかもしれないと感じています。それくらい、開祖との初対面の印象は強かったのです。

**「半ばは他人の幸せを」で
開祖が伝えたかったこと**

高村 釈尊（釈迦の尊称）の「己こそ己の寄るべ」（自分こそが自分の拠り所という意味）という言葉を開祖から教えていただきました。開祖の生い立ちから見ると、開祖こそ、この言葉通りに生きてきた人ですね。

宗 生い立ちがそうなのです。そうせ

ざるを得なかったということでもあります。

高村 セルフメイドというか、自分で、まさに己を頼りに子どものころから生きてきた。

宗 そうなのです。でも、それに私たちが気づいたのは、20年余り前の少林寺拳法五十年史を作る際に、いろいろな文献を掘り返して調べているときでした。

開祖の志が出来上がった時期を、第2次世界大戦中から戦後の混乱期だと思っっている方が多いのですが、実はそうではなくて、幼いころにあつたということがわかりました。貧しい家庭に生まれ、母親が代用教員をしながら、苦労して父たちきょうだいを育てました。でも、父親がいないということいろいろといじめられたそうです。

後に、母は再婚したのですが、その相手が大酒飲みで、暴力を振るうなど、いろいろなことがあつたようです。開祖は、母親を助けたい、妹たちを何とかしなければいけないという思いがあ



つたのですが、自分に力がないと何もできない。悔しい思いをたくさんしたのです。これではいけないという思いから志が出来上がったのです。

高村 開祖のすごいのは、そのような体験から得たものを非常に分かりやすい言葉でまとめていることですね。例えば、「正義なき力は暴力である」「力なき正義は無力である」と。「半ばは己の幸せを、半ばは他人の幸せを」という言葉も半分でもいいなら自分本位な私でもできるかもしれないと思わせてくれました。

宗 確かに、本当に分かりやすい言葉で伝えていました。開祖が本当に言いたかったのは、いわゆる「自己確立」があつてからの「自他共榮」。社会のため、人のため、人として生きようとしたときに、頼りになる自分、いろいろなことを考え判断できる自分がいなければ他人のことも幸せにすることができないということなのです。自己確立と自他共榮が対になっていて、半ばは自己の幸せと、半ばは他人の幸せと

壁にできなければ駄目だという考えではないですね。努力はするが、本当に完璧にこなせるのはもっと上級になって、気がつけば自然に身につけているという考え方ですね。
宗 合格者に「允可状」(免状)を渡すときに、私も同じことを伝えていました。要するに、資格を頂いた時点からその資格にふさわしいと認められるための修業が始まるという考え方なのです。だから、「頑張りなさい」とい

いうのは、人や社会のために役立つ人間になるために、自己確立が必要なのだということなのです。

高村 仏教で言う、「自利利他」(自分が幸せになると同時に他人も幸せにするということ。仏教の精神)と同じですね。私は、半分でいいなら自分でもできるかもしれないと思ってやってみました。

宗 それが父の面白いところで、それによしとします。気が付いたら、自己確立と自他共榮になればいいということと、最初から全部理解しろということではありませんでした。入り口は簡単な方がいいんです。

高村 自他共榮という言葉もいい言葉ですね。嘉納治五郎先生は「自他共榮」と言われています。どちらもいい言葉だと思います。

宗 それは、父の性格が出ていたのかもしれないですね。みんなで楽しく生きるという「喜び」が先でなければいけないという考え。喜びがたくさんあると、悲しみ、辛さには耐えられるけれど、

うことなんですよ。

少林寺拳法 二世師家を継承

高村 開祖がお亡くなりになって、二世師家を継がれたわけですが、そのころの思いをお話しいただけますか。

宗 組織はその頃かなり大きくなっていました。当時、私は22歳でしたから、到底、その重みを理解できませんでし

喜びがない人は耐えることができない。だから、楽しむということはすごく大事なことでと言っていました。「鍛えて、鍛えて」というのは大嫌いな人でした。

高村 若い時、中国の嵩山少林寺で見た、2人ずつ組になり技をかけ合いながら楽しんでる壁画からインスピレーションを得て後に少林寺拳法を創立した開祖の感性からすれば「共榮」ということになると思います。私は、お釈迦様は苦行を禁止したということを受けて、「楽行」とか、「楽道」という言葉を今でもよく使っています。楽行などは開祖も使われましたか。

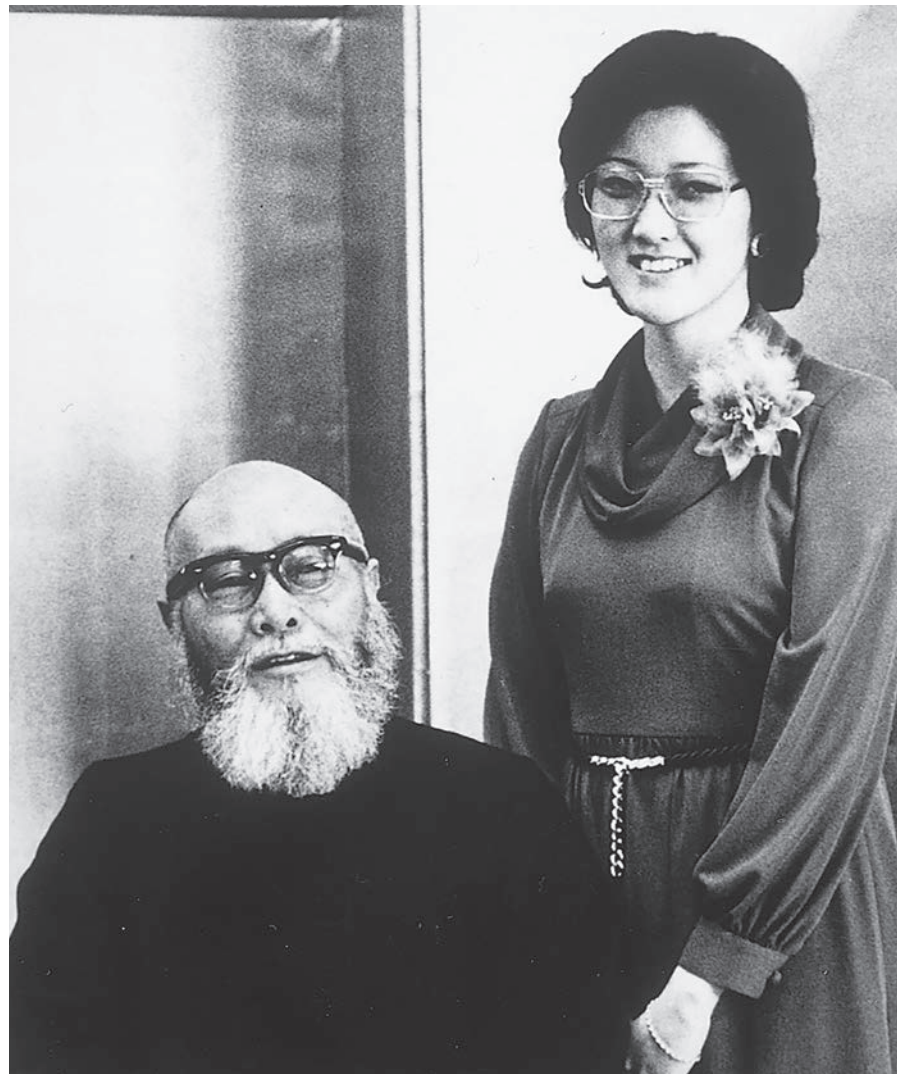
宗 普段からそのような話をしていました。楽しいことはどんどん吸収できます。少林寺拳法の昇級・昇段をするための科目表などもそうですね。「面白い、面白い」が続いていくように作られています。

高村 科目表では、ここまでやれば初段だという試験を受けますよね。しかし、初段に合格するには、そこまで完

た。いくら、父のそばで働いていたといっても、世間知らずでした。また、幼い頃から膝蓋骨と呼ばれる膝の皿の部分の外れやすいという体質だったので、少林寺拳法の修行すらできない状態でしたから、「私には無理です」と承継のお話をお断りしたので。

少林寺拳法は、世界でもあまり例がないんですけど、組織的には一つなんです。そのことだけは、父はものすごくこだわっていました。少林寺拳法を商売として、技芸を教授することで利益を得ようとする考えは絶対に認めない、絶対に目的を変えない。そして少林寺拳法という名称を守ることにこだわっていました。

一方、父は、分裂するならそれで仕方がない。自分が死んだ後のことは一切知らないとも言っていました。無責任にも聞こえますが、本当に開祖の言う理念を大切だと思う人が残れば組織は守られる。そうは思わない人ばかりになっていたら組織は分裂する。ただそれだけのことなのだ。



開祖の秘書として働く

ますか。
宗 やはり目的が変わらないということですね。少林寺拳法を業なりわいにしてしまふと、たくさん人を集めたくなるし、その方が良いということになります。

大会でも常に優秀な成績を収める道院支部に人が集まります。人の質にこだわっているはずが、いつの間にか競技一辺倒になってしまふ危険性があったと思います。道院長支部長たちはいわ

ゆる生活の糧を別に持っていますから、自分の意思で好きな少林寺拳法に打ち込めるし、自分の時間を人を育てることに充てることができるのです。
高村 私の観点から言うと、もう一つ良かったことがあると思います。開祖が育て上げた人が道院長となり、それぞれの職場でリーダーシップを発揮し、仕事上で改革を進めていく。言い換えれば、少林寺拳法で培った人間力が社会に還元されるわけです。これはすごく良いことだと思うのです。
宗 それはよく法話でも話していました。道院では少林寺拳法の先生、会社に行ったら普通のひと、別人格ではない。どこにいても良い影響を与えられる人になりなさいという話はよくしていました。
高村 道院長は弟子の中でもかなりのレベルに達した人ですよ。だからそうした人が各界の第一線で活躍しているのです。
宗 幅広く活躍しています。
高村 これからも良き伝統を続けてく



第二世師家に就任する (1980年)

しかし、分派することは何としても阻止したいのならば、しかるべき人が見つかるまで私が引き受けますということ。師家就任を承諾しました。
高村 それで、どんなことがありましたか。

宗 当初は訳が分からないので失敗もたくさんありました。集団指導体制で長くやってきた指導者たちが、私の下でいろいろな担当を決めて、組織を動かそうとしてくれたのですが、次第に派閥が生じるようになりました。私の経験が浅いこともあって、いろいろなトラブルが起きました。しかし、駄目でも仕方がないと覚悟を決めて自分の足で歩き始めたのが、就任してから5年目ぐらいですね。そこからが本当の闘いといってもいい時期が20年近くも続きました。
高村 そうですか。でも、開祖はやはり由貴さんに継いでもらうことを期待していたでしょうね。
宗 そうでしょうか。
高村 師家に就任する前の5年間は秘書や専従職員をされていたのですよね。
宗 秘書は最後で、その前は事務局の全ての仕事をやりました。
高村 専従職員として働かせたのは、期待していたことの表れだと思いませんか。

す。
宗 事務職員として、秘書として、さまざまなことを経験してから師家に就任したことは、私にとって本当に良かったと思っと思っています。父のこだわり、少林寺拳法の目的も下積みを経て跡を継いだからこそ本質が分かったと思います。
世界に向け、シンボルマーク、表記を変更
高村 師家としての役目を果たすなかで、良き伝統と悪あしきしがらみを感じたこともあったと思いますが。
宗 たくさんあります。
高村 良き伝統を私が一つ挙げるとすると、本部の専従職員は別として、全国津々浦々の道院長は、みんな他に職業を持っていますよね。これは開祖のときからそうでしたね。
宗 今もそうです。
高村 良き伝統として続けられたわけですね。実際には何が良かったと思



香川県多度津町にある現在の少林寺拳法総本部・錬成道場。
世界に向けてシンボルマークを変更し、少林寺拳法も英語表記とした

ださい。

一方で、由貴さんが組織改革されたのはどういうところですか。

宗 組織が上下関係に厳しく、先輩・後輩の間で議論が進みませんでした。

また、年功序列型の風土があるように感じました。年功序列は本来、悪いことではありません。キャリアを持つ人が経験を生かして関わることはいいのですが、師弟といった上下関係にありがちな「上への配慮」によって結果的に議論が停滞してしまうことがよくありました。そこで、各委員会を設置し、上下関係に縛られず自由に議論できるように改革しました。

高村 他にはどのような改革を行いましたか。

宗 例えば、私自身が本山の壇上で、全国から集まった門人と対話しようとする1対数百人となるわけです。これでは本当に分かり合うことはできません。そこで、私が地方に出ていって対話の回数を増やすことにしました。自分から動くことによつて、1対10人

ればいいのではないかと思います。そこで武道を楽しみたい方を対象にした

コース、健康増進や教えを生かして人の役に立ちたいという方のためのコースを設けました。次に指導者の育成。現在、連盟では、少林寺拳法を極めたプロコース、そのための前段としてのアシストコース、初心者のためのライトコースの三つのコーチング指導者育成コースを設けています。

高村 地域ボランティア活動とはどんなものですか。

宗 しつけ教育の一環として少林寺拳法を子どもに学ばせたいという保護者がたくさんいます。わが子の送り迎えをするお母さんたちの中には、子育てや他にもいろいろな悩みを抱えている人もいます。技術の修練に特化せず、健康体操をしながら子育てや人間関係などを相談できたり、助け合えたりする環境づくりをしています。

高村 介護福祉の面ではいかがですか。

宗 一例ですが、少林寺拳法の拳士で、

ったのです。

少林寺拳法の読みを英語表記にしたのも、音で認識させたいということなのです。例えば中国語読みだと、少林寺拳法は、「シャオリンスウ・チュアンファー」となり、まるで別物ですよね。だから、英語表記にすることで世界中に「SHORINJI KEMPO」として認識されるようになりました。

健康、奉仕、福祉……

広がる少林寺拳法の可能性

高村 少林寺拳法を通じての健康増進、地域ボランティア活動、介護福祉活動について伺います。

宗 友達づくりを目的に部活動を行うとか、自分の欲求を満たすために修行をしたいという若者が増えていると感じます。一方、礼節や忍耐といった武道の真髄を追求する本来の目的のための修行を望む若者もいます。人の要望はさまざまです。

私は、まずは楽しく体験してもらえ

ぐらいで話すこともできるし、もちろん1対1というのもあります。対話の相手を段別別に分けたり、拳士の保護者とお話ししたりと、さまざまな形に変えながら20年以上も続けてきたことも改革の一つです。

高村 私の記憶では、由貴さんがトップになられた直後だと思いますが、「名譽段」を廃止しましたね。

宗 そうです。名譽段があったのはわずかな期間でしたが。

高村 名譽段をやめたのは第二世の正義感だろうと思っていました。科目表にのつとつて稽古に励み昇段する人がいる一方で、それを経ないで段を取得する人がいることはおかしいと思われたのですね。

宗 それから、シンボルマークも変更しました。これはさまざま議論がありました。今は理解してくる方が多いと思います。いわゆる、知的財産の問題なのです。世界で一つの少林寺拳法を守るためには、世界で使えるシンボルマークでなければならな



30代後半に脳梗塞を患い大変な状況になりながらも、今は回復した方がいます。その方が、少林寺拳法が力を必要とせずに人を倒せるならば、逆に、体を起こす場合にも力は必要ないのではと考え、患者の体を楽に動かす独自の介護技術を編み出したのです。その方は今、看護師や介護士を対象に、腰に全く負担のかからない介護法を教えてください。私も体験しましたが、驚くほど力が要らず、腰に負担がかかりません。介護業界は、腰を痛めて離職する人がとても多いそうです。この技術は、離職率の低下にも役立つかもしれません。

高村 「柔法、剛法、整法」に加えて、「介護法」が入ったと、そういうふうには理解すればいいですか。

宗 そうです。介護法です。『少林寺拳法で介護ができる』という書籍も出版され、各地で研修会も開催しています。

高村 少林寺拳法グループ全体で介護事業をやるらしいという噂を聞いて、

納得できないという声が複数ありましたのでお聞きしてみたのですが、今のご説明であれば私は納得します。

世界で活躍する、多数精鋭のリーダー支援を期待

高村 この40年間を振り返って、今思うことは何でしょうか。

宗 グループの運営は三世師家に委ねた以上、私は相談されたときにしか口出しはすべきでないと思っっています。なので、組織の将来は語らないと決めています。いずれにせよ、父の教えはどんなところにも役立ついると本当に実感しています。

高村 社会のあらゆるところで、宗道臣先生の教えを受けた人たちが活躍し、リーダーシップを発揮しているのを、私はたくさん知っています。由貴さんの教えを受けた人が、あらゆるところで活躍している場面もたくさんあることと思います。既存の組織だけでなく新しい分野のリーダーとして頑張

る人が出てきてほしいと思います。それについて、私から由貴さんをお願いしたいことがあります。世界で活躍する、少数精鋭ではなくて、多数精鋭の支援を考えていただきたいと思っいます。

宗 実は「Yuki, cafe」と名付けた「宗道臣塾」があり、そこでセミナーを開催しています。コロナ禍ですから、今はリモートで実施しているのですが、その塾長を務めています。

武道関係者一丸で 武道の地位を高めていく

高村 最後に、月刊「武道」の読者へメッセージをお願いします。

宗 私が少林寺拳法の師家就任中、常に願いとして持っていたのは、武道の社会的価値を高めたということだと思います。社会的価値はやはり教育面だと思っうのです。スポーツ化や競技化も、それ自体、悪いことではありませんが、

教育面で武道の価値をもっと上げたいと思っって、この40年やってきました。

本家本元の日本より外国の方が武道の地位が高いのです。武道の指導者は教育者として、社会的に一置かれています。一方、日本では社会的地位はまだまだ低く、それを我々武道関係者は重く受け止めなければなりません。何が足りないのか、みんなで一丸となっって考えていかなければいけないと思っいます。月刊「武道」も、読者の方がたくさんいらっしやると思うので、一緒に考えていければと思います。

高村 武道9団体と日本武道館で組織する日本武道協議会には少林寺拳法連盟も参加していただいています。私はいつも言っっていますが、みんな違っつてみんないい。お互い、切磋琢磨して、みんなが武道の地位を高めていきまっよう。

宗 よろしく願っいます。

高村 本日はどうもありがとうございました。

宗 ありがとうございます。